

世界遺産アカデミー認定講師 File No.33

このコーナーでは、世界遺産アカデミーの啓発活動にご支援いただいている世界遺産アカデミー認定講師の方に毎回スポットを当てて、お話を伺います。第33回目の今回は、筑波大学大学院博士課程で世界遺産研究を続けている、箄島大悟(おさじま・だいご)さんです。毎年、世界遺産委員会に参加されている箄島さんの、研究者としての世界遺産への想いを語っていただきました。

——世界最高の環境で、世界遺産研究に携わる

世界遺産を知ったきっかけを振り返ってみると、高校時代だった石見銀山登録の2007年は言葉として認識してはいたものの、実際に意識して訪れた最初の場所は、大学時代の英国・ウェストミンスター寺院でした。今は大学院生で自由に使えるお金に乏しいので、ボン、クラブ、マナーマも世界遺産委員会にかこつけて、その国の世界遺産を巡っています。幼少の頃から、福岡県大川(おおかわ)市の父親の実家から佐賀県吉野ヶ里(よしのがり)遺跡や熊本城などに足を運んでいたのが、歴史と関係するものが身近にありました。もともと歴史好きですから、世界遺産の分野にも入りやすかったのだと思います。世界遺産を研究テーマとし始めた

のは大学ゼミで、「都市政策」を研究対象に東京の都市をひとつ取り上げて、論文を書きました。師事した教授は「世界遺産の都市がもっとも美しい姿であろう」という想定を立てていて、研究活動の一環で、世界遺産も現地視察しました。大学院進学は、そのゼミ教授が定年退職を迎えてしまうため、世界遺産専攻のある筑波大学大学院を選びました。素晴らしい先生方にも恵まれて、これ以上ない環境の中で、世界遺産条約に主眼を置いた新規登録されるまでの過程やユネスコ平和理念に基づく運用を研究しつつ、世界遺産条約成立時におけるIUCNとICOMOSの役割と、それらの制度的システムへの反映に関する博士論文を執筆しています。

世界遺産委員会にはオブザーブ参加で、どのように世界遺産が登録されていくのか、現実的なものとして感じられます。各国の政府代表団

の滞在時間には制限があり、効率的で円滑に進めざるを得ず、登録への合意が、既についています。そういった形式的な流れが、緊張感とともに、直に伝わってきます。ロビー活動や政府間協議は、基本的に当然のことです。「第42回世界遺産委員会」では、NGO団体「World



前代未聞、波乱万丈、マナーマ会合でのいち枚

Heritage Watch]の活動がとても輝いていて、保全状況の不十分ではない推薦物件に関する大胆な発言が出されました。会議で何が起きているのか、カメラに映らないシーンも、間近に見えます。たとえば、ワインの生産地「プロセッコ」は不登録勧告を受けていましたが、イタリア政府は登録へのロビー活動を実施。反対国が投票による決議を提案しました。イタリア政府は賛成多数と意気込んでいましたが、蓋を開けてみたら、賛成多数だったものの必須得票数には届きませんでした。委員国ではないため発言権をもたないイタリア政府は、大慌てで委員国アンゴラ共和国の席に駆け寄り、指示を出しました。議長はその場で厳重注意。2国間のパワーバランスがあらさます。

また、顕著な普遍的価値(OUV)について、設定基準そのものへの見直しが求められて

いるのではないのでしょうか。OUVが必須ではない無形文化遺産条約は“地域的なもの”に顕著な価値を与えようとしていて、世界遺産条約は“顕著な価値”を地域的なものに広げようとしています。結果として、世界遺産条約の価値が引き下がってきています。1,000件以上となった数への憂慮も否めません。研究テーマにも繋がりますが、突き詰めていくと、世界遺産条約に基づいた正当な手続きを踏んでいるかどうかです。不登録から逆転登録したサウジアラビアの『アル・アハサ・オアシス:進化する文化的景観』や、ICOMOSとの対立が露呈したドイツの「ナウムブルク大聖堂」は、いち例に過ぎません。世界遺産条約の信頼性が危惧されます。世界遺産の本来あるべき姿を追求しながら、こういった矛盾や課題、保全状況の芳しくない登録が増加しているがために増えている、

“隠れ危機遺産”の解消にも取り組んでいきたいです。

——世界遺産は、好奇心を刺激してくれる、目醒めのきっかけ

お勧めする世界遺産は、「第41回世界遺産委員会」の時に訪れた、「クラブの歴史地区」。街が活着しているのです。戦火を乗り越えた歴史の重みも感じさせますが、美しく洗練された新しい街並み。それでいて、旧いものも、決して古さを感じさせず、上手にまとまっているのです。地域の方々と距離感も近く、昔ながらの温かさが伝わってきます。足を伸ばした「ヴィエリチカ岩塩坑」も感動的でした。地上から地下50階まで(約64m)果てしなく続く階段



クラブの中央広場は人々の活気で溢れている

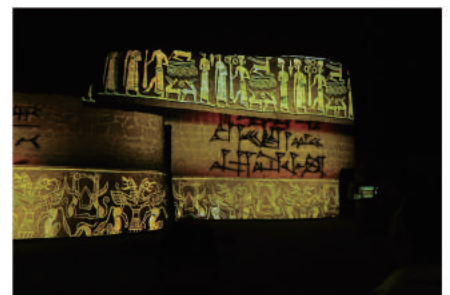
を降り、ひたすら坑道を進んだところで、あの「最後の晚餐」と出会うのです。昨年は、世界遺産委員会企画のオプションツアーで、夜の「パーレーン要塞」を訪れました。砂漠地帯なので日中は外出できませんし、タクシーの中も気温50度を振り切ることもあります。「パーレーン要塞」でとりわけ素晴らしかったのは、城壁全

面に映し出されたプロジェクション・マッピングです。古代から現代に至るパーレーンの壮大な歴史ストーリーが約10分間、美しい映像で流れました。今年の開催地アゼルバイジャン・バクーの「シルヴァンシャー宮殿」や「乙女の塔」も楽しみです。今ももっとも訪れてみたい世界遺産は「ドゥプロヴニクの旧市街」です。自由・自治を重んじるクロアチアの在り方と、観光化と伝統的街並みとのバランスが興味深いです。

授業を受け持っている神田外語学院では、学生たちの興味やレベルに合わせて工夫しています。世界遺産条約や登録過程の説明は睡眠導入剤となってしまいますから(苦笑)、『四川省のジャイアントパンダ保護区群』や『メンフィスのピラミッド地帯』などの分かりやすい世界遺産から、楽しく学んでもらえるように努めています。

世界遺産は好奇心を刺激してくれる、目醒め

のきっかけです。そこから踏み込んで、身近な文化資源や自然にも触れてほしい。世界遺産だけでなく、あらゆるものに素晴らしい価値があるということ、そういった新しい気づきを伝えられる講師を目指したいです。



パーレーン要塞ではプロジェクション・マッピングで歴史の解説を行っている